

259 子宮体癌における術後 MPA 併用 VCAP 療法の有効性、予後因子についての検討

広島・呉共済病院

平田英司, 笠岡永光, 岡野真一郎, 勝部泰裕

【目的】当科における子宮体癌の標準術後療法としての MPA 併用 VCAP 療法に関して、当科症例をもとにその有効性、予後因子を retrospective に検討した。

【方法】当科で1989年1月から2001年10月までに診断、治療を施行し、予後を確認でき、インフォームド・コンセントの得られた子宮体癌74例を対象とした。症例は平均57歳、未妊婦10例、糖尿病や高血圧等の合併は20例、臨床進行期ではI期48例、II期9例、III期13例、IV期3例で、病理組織学的に類内膜腺癌45例、腺棘細胞癌19例、明細胞腺癌5例、腺扁平上皮癌3例であった。MPA療法は400mg~600mg/dayを1年以上、VCAP療法はIb期以上のハイリスク群にVCR1.5mg/body, CDDP 70mg/m², epi-ADM50mg/m², CPM400mg/m²を3コース以上投与した。生存率の算出はKaplan-Meier法、有意差検定はLogrank検定を用い、P値<0.05を有意とした。また独立予後因子の多変量解析も同時に行った。

【成績】全症例の5年生存率は86.7%、うち治療群(31例)84.2%、非治療群(43例)87.2%で比較的良好であった。I, II期では、治療群、非治療群で有意差なく、III, IV期では、治療群の5年生存率75.0%、非治療群の5年生存率0%、P=0.01と統計学的有意差を認めた。多変量解析では本治療、年齢、臨床進行期で有意な傾向を認め、独立予後因子の可能性が示唆された。また傍大動脈リンパ節郭清施行例の有意な予後改善は認めなかった。

【結論】子宮体癌における術後 MPA 併用 VCAP 療法は、とくに III, IV 期においてはその有効性を示唆する結果となった。

9日(火) 口演

260 子宮体癌における傍結合織浸潤および骨盤・傍大動脈リンパ節転移に関する検討

近畿大

小畑孝四郎, 椎名昌美, 小池英爾, 星合 昊, 野田起一郎

【目的】子宮体癌に対して傍結合織の摘出、傍大動脈リンパ節郭清が臨床上に必要なかどうかを明らかにすることを目的とした。

【方法】広汎子宮全摘術および傍大動脈リンパ節郭清を行った症例について傍結合織浸潤の有無および骨盤・傍大動脈リンパ節転移の有無と筋層浸潤の程度との関連性について検討した。

【成績】傍結合織浸潤を認めたものは筋層浸潤0で0% (0/5)、1/3以下で3.2% (2/63)、1/3~2/3で26.7% (8/30)、2/3を超える症例で27.3% (9/33)であり、筋層浸潤1/3以下の症例では高分化型腺癌の2症例が含まれる。また、骨盤リンパ節転移を認めたものは、筋層浸潤0で0% (0/20)、1/3以下で4.2% (5/118)、1/3~2/3で17.4% (8/46)、2/3を超える症例で32.7% (16/49)であった。さらに、傍大動脈リンパ節転移を認めたものは、筋層浸潤0で0% (0/2)、1/3以下で0% (0/14)、1/3~2/3で29.5% (5/17)、2/3を超える症例で31.3% (5/16)であった。

【結論】以上の検討から、子宮体癌に対しては筋層浸潤のない症例以外は骨盤リンパ節郭清を含む広汎子宮全摘術が必要であり、筋層浸潤1/3を超える症例には傍大動脈リンパ節郭清が必要である。

261 抗精神病薬被爆による閉経前女性子宮体癌発生に関するケースコントロール研究

千葉大¹, 同付属病院²山澤功二¹, 関 克義¹, 鈴鹿清美², 三橋 暁², 田中尚武¹, 松井英雄¹, 関谷宗英¹

【目的】閉経前子宮体癌でホルモン異常がリスク因子である事、また高プロラクチン血症が抗精神病薬の一般的な副作用である事が知られている。そこで抗精神病薬被爆と子宮体癌発生の間に関連性があるか否かを明らかにする。

【方法】1989年から2000年に受診した閉経前女性においてネステッドケースコントロール研究を行った。ケース群は病理学的に再確認した子宮体癌41症例で、コントロール群は各ケースに子宮体癌を有しない3例を年齢、外来初診日をマッチングさせた計123例とした。肥満、分娩、高血圧罹患、糖尿病罹患、エストロゲン製剤使用、抗精神病薬使用の有無を各々2区分変数として解析した。オッズ比(OR)、両側検定P値、95%信頼区間を条件付きロジスティック回帰にて解析した。また、子宮体癌41例の組織型など病理所見について再検討した。抗精神病薬被爆のある子宮体癌5例中4例において血清黄体化ホルモン、卵胞刺激ホルモン、プロラクチン、エストラジオール、プロゲステロンの測定を行った。

【成績】抗精神病薬被爆(OR 5.4, P 0.036)、糖尿病罹患(OR 9.3, P 0.004)、肥満(OR 4.9, P 0.004)が多変量解析にて有為な独立因子であった。抗精神病薬被爆の有無により子宮体癌の病理学的所見の有為な違いは認められなかった。抗精神病薬被爆のある子宮体癌4例におけるプロラクチン、エストラジオール、プロゲステロン値は各々34~258 ng/ml, 32~110 pg/ml, 0.4~0.7 ng/mlであった。

【結論】抗精神病薬被爆は、閉経前女性において子宮体癌の有為なリスク因子であり、抗精神病薬被爆による高プロラクチン血症が関与している可能性がある。